グレイ・リテラチャー

森　仁史

平身低頭。まずもって筆生は読者の皆様にお詫び申し上げねばならない。前号に紹介した『稿本日本帝国美術略史』の図版を間違えて紹介してしまった（註）。これまでに、東京国立博物館も研究者ももっとも豪華な装丁の再版本を初版であると紹介し続けてきた。筆生も仄かな疑念をいだきつつも同じ轍を踏んでしまった。日本美術史の元祖『略史』は偉かったのだと思い込んできたからだろうか。なんだか、天心の呪いのような気すらしたものである。兎も角、申し訳ない。

さて、表題の語は若くして亡くなった友人の図書館人から聞いた言葉である。図書館が収書の対象とする範囲から漏れている本を指すらしい。木茂先生が指摘されてきたように、図書館の世界ではながらく美術展覧会図録（カタログ）などというものは百貨店の販売カタログと一緒にされてきた。しかし、国立国会図書館発行の『参考書誌研究』第五十号（一九九九年）では、この大半を裂いて同館所蔵の美術展覧会関係資料目録が掲載されたくらいだから、もう展覧会カタログは立派に市民権を得ているとしていいだろう。

しかし、グレイゾーンがもっと広いものだということは古書会館に足を運ぶ人々は十二分に御承知のことであろう。デザインのフィールドワーカーを自認する筆生などは日々そうした資料に手を染め、灰色どころかもう真っ黒になってしまっているかと思う今日此頃である。

そのひとつが出版案内で、これが前号の執筆のきっかけを与えてくれることになったのであった。今回はこれらの限りなく黒に近いグレイゾーンの一端をご紹介したい。これらは到底正規の出版物といえないし、発行した当の出版社ですら保存していないことも多いような存在である。

①『東京帝国博物館御蔵版稿本日本帝国美術略史』日本美術社、明治四十年九月、A5判、三十四ページ、コロタイプ口絵

これは出版案内としては例外的に豪華なもので、出版社の熱意の感じられるものである。また、この手の出版物としては珍しく発行年月が記されている。博物館総長九鬼隆一の序文の全文を掲載し、口絵見本にコロタイプを使用し、装丁を図示している。この装丁のひとつが初版に極めてよく似ていたことが冒頭に述べた失敗のもうひとつの誘因ともなったのであった。また、このなかに「日本美術社は今や最後に発売の一事に及んで全く已に毫微の余力をも之が奔走に用ゆる能はざるに至って、某友人某々の経営せる新進にして信用ある書肆、株式会社隆文館に発売一切の事務を挙げて委託する事となれり。」とあり、出版と販売が別会社になったという外部からは分かりにくい事情を明かしている。

②『美術書発行目録』審美書院、発行年不詳、A5判、四十九ページ、網版口絵、木版一枚

審美書院は明治三十二年から日本美術作品の豪華図集を相次いで発行し、日本美術史の形成のうえで大きな役割を果たしたことが注目されているのだが、この冊子でも明治三十三年のパリ万博においてはグランプリを獲得したことを宣伝している。多色版画による複製を含めて様々な印刷技法による美術図版印刷に秀で、海外での評価も高かったのであった。冒頭の口絵に社屋内外や版画工房の写真があり、これを見ると五十人以上の職人を抱えるかなり大規模な工房だったようである。その他、木版画見本、内外新聞による紹介記事、九鬼隆一「浮世絵派画集に対する評論」などが並んでいる。発行年は記されていないが、掲載記事の年期から明治三十年代後半と推定される。

③『美術図書目録』第十八回、芸艸堂、大正四年、A六判、一六二ページ

芸艸堂は現在も京都を本拠に活動している日本ではもっとも息の長い美術出版社である。大正初期に既に十八版を重ねているので、恐らく明治三

十年代から出ているのであろう。この版では、自社の発行書を習画帖・漢画・雑画・人物・山水・風景画・活物写真・草花、虫類・古代模様・図案・衣服模様・紋帳、色本、標本・定期刊行・書画伝、画論、鑑定・茶、花、作法・書法、庭造、和歌・雑書に分類して配列している。今日の美術観とは甚だ異なったジャンルが当時の需要を反映しているし、国民的な絵画観の基軸を示しているようである。印刷技法としては、半数程が木版による多色図版を中心としたもので、残りの多くが写真版を用いている。

④『美術書目（美術図書総目録）』第三十二号、芸艸堂、昭和十年、B六判、一三八ページ、コロタイプ口絵、木版表紙

同じ芸艸堂の出版目録であるが、もう少し後の時代のものである。昭和初期にもまだ木版による多色図版を中心とする画集や画譜が盛んに出版されていた様子がよく分かる。とくに、③にも掲載されているのだが、図案に分類されているのはこの当時のデザイン見本帳であり、こうした出版物は様々な業種の工房の需要に応えるものであり、これも図書館にとってはまさしくグレイ・リテラチャーであった。つまり、時代の流行や内外の時代趨勢に支配される図案集などというものは、学術的に保存価値のないものと判断されていたのであろう。従って、いつどんな図案集が出ていたか知るには、こうした図書目録に依らなければならないのである。また、この号に当時の芸艸堂京都店と東京店の社屋の内外の様子が撮り収められている。両店とも今も同じ場所で営業している。

⑤『販売部月報』第一号、大日本絵画講習会、明治四十二年、A5判、三十二ページ

明治末に絵画の通信教育で成功した団体の通信販売カタログである。同会の木田寛栗は『懐中書画便覧』など斯界向けの出版を息長く続けた人物である。この月報には、絵具に始まり、パレット、筆、紙など絵画用品が木口木版入りで紹介されている。この時期絵具はニウトン、ボールジョイス、ルフランなど総てが輸入品であった。例えば十二色油絵具は六円五十銭もしている。また、画材の他に末尾にはナイフ、帽子、ハーモニカ、アコーディオン、ブーツ、懐中時計も掲載されており、当時の洋画愛好家がいかなるいでたちで絵画制作に励んでいたか想像を逞しくさせてくれるのである。

⑥『アルス月報』一九二八年五月号、アルス、B5判、八ページ

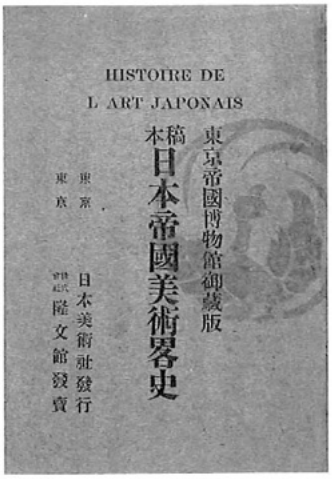
アルスは北原白秋と山本鼎のアイデアから発展して、大正十三年（一九二四）に北原の弟である北原義雄に美術雑誌『アルス』を創刊させたことから始まった。この月報については、筆生も詳細はつかめていない。時として、アルス発行の図書に挟みこまれているのを見る程度である。図版に掲げた号には『現代商業美術全集』の宣伝が掲載され、並製本と装飾本の二種類が発行され、毎月一回発行され事前申込み制をとっていたことが記されている。発行された全集の奥付に「非売品」としてあるのは、こうした販売システムのためであったことが分かる。

やがて円本時代に入ると、各種の全集のための案内パンフレットが雲霞の如く発行され、しばしば古書市場にその姿を現している。ということは、古書会館に集う人々にとってはこれらが一顧だに値しない資料どころか、自己の研究やコレクションにとって有益であることがあまねく知られているのである。筆生のわずかな知見などとるに足らない蛇足に過ぎないのかもしれない。しかし、フィールドワーカーはやはり薄汚れて見えても自分のフィールドに愛を感じているのであり、その価値を共有したいとも思っているがゆえに、ついつい筆を滑らせる次第なのである。

註　第七号二十四ページの図版に誤記があり、以下のように訂正願います。

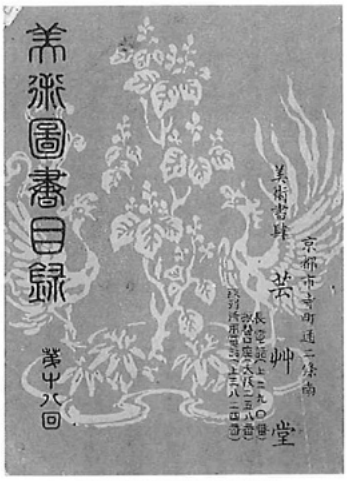
②→④　④→⑤　⑤→②

2　審美書院『美術書発行目録』
同　内容部分



1　日本美術社『稿本日本帝国美術略史』(明治44年)

4　芸艸堂『美術書目』(昭和10年)
同　内容部分



3　芸艸堂『美術図書目録』
(大正4年)

6　アルス『アルス月報』(昭和3年)

5　大日本絵画講習会『販売部月報』
(明治42年)

一寸

第八号　二〇〇一年十月

第八号目次

新・旧刊案内8
近代日本美術史研究の歴史を論ず　青木　茂　1
柿下廼舎漫録
月耕堂・昭和初期の浮世絵ブーム・伊東忠太『阿修羅帖』とジョネー岡田の機械木版　岩切信一郎　5
残されたひとやま《清洲橋》
—藤牧版画の後摺りについて6　大谷　芳久　9
図画教育者列伝（一）　佐藤左内　金子　一夫　15
くさい話　丹尾　安典　18
太盛堂・宇敷則明覚書き
銅・石版画遺聞8　森　登　21
グレイ・リテラチャー　森　仁史　25
新発見の異版「冬虫夏草」二種　山田　俊幸　28
第一号から第七号　執筆一覧　31

新・旧刊案内8

近代日本美術史研究の歴史を論ず

青木　茂

・清水澄編『現代画家番附』昭和十八年一月五日第八十四版、美術倶楽部出版部、B6判、一五九頁（出版文化協会承認番号がどこにも記載されていない珍しい本である。知らなかったとは思えない。載せるのを忘れたか）。

昭和十八年に出版された美術関係図書の、早い方から二番目がこの本であろう。大正六年一月五日の第一版から数えての八十四版である。番附は現代でも相撲の番附があり長者番附（昔は「持〇」〈もちまる〉番附といった）は毎年税務署が発表してくれる、田舎の呑み屋へ入るとその地方の方言番附のれんが板壁に鋲で止めてあったりする。東西に分かれた力士の地位を順に書いた相撲の番附にならった書画番附は化政度からあり、文展開設前まではなかなかに面白かったものである。原則として一枚摺りのものであったが、号を不濁という清水澄氏のこれは冊子本である。さすがに時代を感じてか、昭和二十六年版からは突然理由を告げずに『現代美術家名鑑』となり、現在は『二〇〇一年版　美術家名鑑』となっている（清水治・清水康友編、二〇〇一年一月五日第一七三版、美術倶楽部、B5判、九一三＋二三六頁）。二〇〇一年版で価格を示すと故人東山魁夷八五〇〇万、高山辰雄三〇〇〇万、片岡球子二二〇〇万円であり、昭和十八年版では東山四〇〇円、高山一〇〇円、片岡二〇〇円である。僕の弱い頭では何倍になったのか計算できない、本の定価は一円三〇銭から四〇〇〇円になっている。ことのついでに紹介しておくと、

・山田正道編『現代美術家総覧』昭和十九年三月十日、美術年鑑社、B6判、二二二頁